

夕で泊まったホテルの前にも路上生活の人たちは大勢いて、私たちが出かける時、彼らはちようど歩道にある井戸で朝シャワーをしていました。しかし、その雰囲気は暗くて惨めという感じではなく、むしろ明るく活き活きとした空気が伝わってきたのです。通りがかりの観光客にすぎない私にはとても理解の及ばない世界があるように思えました。

また、私たちはマザー・テレサが創立した「神の愛の宣教師会」の修道院を訪問しました。会の日本人シスターに生前のマザー・テレサの部屋、展示室など修道院の内部を案内していただき、マザー・テレサのお墓の前の祭壇でミサに与ることが出来ました。聖堂には祈りを捧げるシスター達の後ろに、じつと祈るマザー・テレサの像が置かれていました。その像はほんとうに小柄で、どこからあのパワーが…と不思議に思えるほどでした。また、「死に行く人の家」では旅行前に見た映画（オリビア・ハッセー主演の「マザー・テレサ」）さながらの光景に足がすくむ思いがしました。今は、毎朝一番に数

人で駅に行き、行き倒れている人々を車で連れてきて、看病するのだそうです。様々な国からのボランティアの人たちにお会いしましたが、不思議なことにインド人は一人もいませんでした。「スミコさん」という日本人ボランティアの方のお話では、インドの人々にとつて彼らは可哀想でも、気の毒でもなく、現在こうあるのは生前の行いが悪かったから当然の報いなのだそうです。

このコルカタの地でマザー・テレサが「もつとも貧しい人の間で働くように」という神の声を聞き、そのために生涯を捧げられたことを思うと、神のはかり知れない御心に胸が熱くなるのを感じられずにはいられませんでした。

ワランガルは、インドの真ん中より少し南に位置するハイドラバードから、車で四時間くらいのところにある村です。その辺り一体に住む少数民族の布教に生涯を捧げておられる神言会のアントニ・サミー神父様の活動を援助しようと、シューベルト神父様は三年くらい前から、その民族の子どもた

ちの学校を建設するために募金活動をしてくれました。ほとんど子どもたちが、教育を受けられる日本とは異なり、インドでは貧富の格差が激しく、教育を受けたくても受けられない子どもたちが非常に多いと言うことです。今回の旅は、その視察も兼ねていました。学校はほとんど完成していて、七百八十人の子どもたちが私たちに歓迎してくれました。習ったばかりの英語で歓迎のスピーチをしたり、演劇をしたり、そして、鮮やかな衣装でインド舞踊を披露してくれました。彼らのきらきらした目の輝き、生き生きした顔の表情、そして、私たちを歓迎しようと一生懸命に取り組むその一途でひたむきな心に言いようのない感動を覚えました。そして、歓迎会の後、私たちを取り囲んで、好奇心いっぱい話しかける子どもたちを見ながら、彼らに明るい未来が開かれて本当に良かったと心から思いました。彼らの半数は家が遠くて、学校に通うことが出来なく、校舎のコンクリートの上に簡単な布を敷いて、その上に寝泊りしているそうで、神父様は彼らの校舎を建設するため、今も募金活

動をしておられます。

今回の旅は、「何故インドなんかへ行くの？」と周りの人たちが不思議がられ、私自身もいろいろな点で不安が多く迷いましたが、年齢的にラストチャンスだからと思いついて参加しました。たった十日間の駆け足の旅でしたが、私の心を強く揺さぶり、「生きる」ということについて再考を促す思い出深い旅でした。

